

多自然川づくり取組事例

タイトル：肱川かわまちづくりについて		
水系/河川名：肱川水系/肱川	河川分類：大河川	
河川の流域面積：1210	整備計画流量：6200m ³ /s	セグメント：2-1
事業：環境整備	事業開始年度	令和2年度
目標設定：定性的	段階	D(実施・施工時)
課題・目的(主な)：水辺へのアクセス改善、その他		
工法(主な)：護岸整備、階段工の整備、管理用道路の整備		
配慮事項(主な)：河川景観への配慮、歴史・文化への配慮		

背景・課題、目標設定

〈背景〉

肱川はかつて舟運によって人や物資の輸送が盛んに行われていた。当時は大小さまざまな「河港」が存在し、「まち」と「かわ」の行き来が盛んであった。

〈課題〉

平成30年7月豪雨による甚大な被害を受け、肱川河川激甚災害対策特別緊急事業による築堤及び堤防嵩上げ等が早急に進められていた。市民の安全な暮らしを守るとともに、堤防整備により「かわ」と「まち」が遠ざかることがないように、まちづくりをすすめていく必要があった。

〈目標設定〉

平成30年7月豪雨災害からの復興にあわせて「かわみなど」を整備し、「かわ」と「まち」が一体となった空間を創出することで、地域活性化を図る。地元住民の利便性向上はもちろん、観光客が水郷大洲を堪能できる仕掛けにもなり、肱川流域におけるかつての華やき、新たな賑わいの場を創出する。



取組内容・対策例(1/2)

しろしたかわみなど(左岸側)

- ・肱川の伝統的な治水工法であるナゲを再現し肱川の水際まで散策可能とするナゲテラスの創出
- ・花壇を取り除き、キッチンカー等を呼べる広々とした通路や広場でマルシェ等の開催
- ・年齢問わず利用できるスロープ及び鵜飼い船乗降場の設置
- ・カヌーの乗り降りが快適な広々とした階段の創出
- ・このエリアが「しろしたかわみなど」であることを示すサインの設置

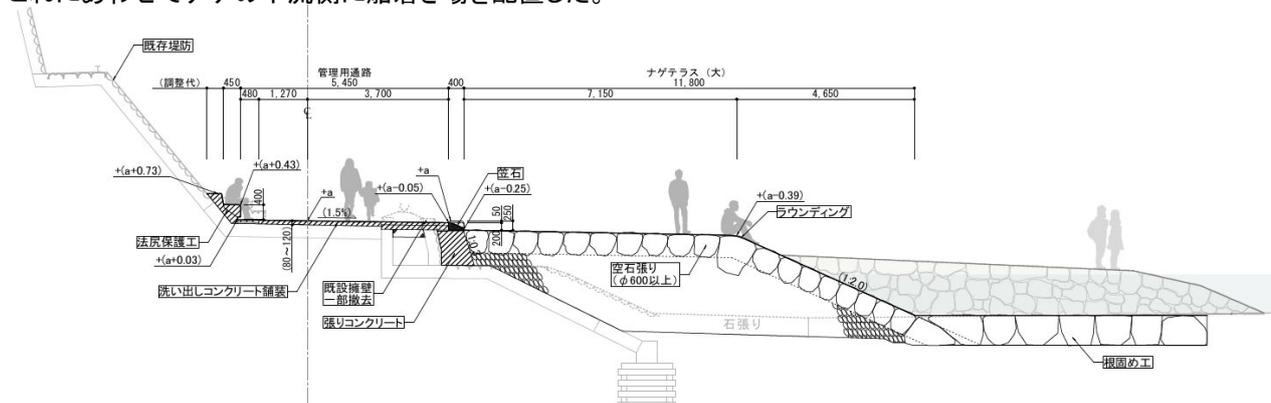


取組内容・対策例(2/2)

整備内容は協議会やワークショップを通じ、国や市だけでなく地域の住民や学生にも意見を聞きながら検討を行った。その中で親水施設としてテラスを整備する方針となり、肱川の歴史的な景観の継承を目的に「ナゲ」をモチーフとしたテラス(ナゲテラス)を整備することとした。

「ナゲ」とは古くから肱川に存在する空石張りの水制工である。主に肱川の湾曲部の外側に川の流れに対して斜めに設置され、河岸保護や舟運水深の確保、船着き場機能等が主な目的といわれている。

ナゲテラスの設計時には下流側の流速を緩和する治水の機能を兼ねつつ、親水性も考慮したデザインを意識した。当初は5m程度水面に張り出す形を想定していたが、設計時には鵜飼い船にヒアリングを行い、船の長さに合わせて10mほど張り出す形とした。こうすることで水流を押さえ、乗り降りの際に船を護岸に直交して留めやすくした。これにあわせてナゲの下流側に船着き場を配置した。



モニタリング結果、アピールポイント、今後の対応方針

〈アピールポイント〉

完成後のナゲテラスでは下流側で鵜飼い船やカヌーの発着、ナゲテラス上から肱川を眺める利用者や足を川につけて遊ぶ子供の姿が見られる。また、令和6年度にはしろしたかわみなど及び右岸側の緑のかわみなどにおいて「肱川かわびらき」としてイベントが開催された。カヌーやSUP、渡し船の体験、マルシェ等も開催され、多くの人々が訪れた。



〈今後の対応方針〉

肱川かわまちづくり第1期として整備した箇所においては、今後も利用者数の調査等のモニタリングを実施していく。今後は第2期計画として、肱川河口付近の長浜地区および上流の肱川地区においてかわまちづくりの検討に取り組んでいく。長浜地区では長浜内港埋立事業、肱川地区では肱川生態系ネットワークおよび山鳥坂ダム水源地域ビジョンの検討が同時期に進行していくことになる。かわとまちが一体となった環境整備や希少な野生動物や地域社会との共存、地域活性化および経済振興、ダムを中心とした地域活性化の検討を実施するこれらの取り組みと連携することで、より多様な視点からのかわまちづくりを実施していく方針である。

備考

- 設計者＝株式会社四電技術コンサルタント、株式会社上條・福島都市設計事務所
- 施工者＝石岡建設株式会社